

シンフォニエッタ 静岡 第81回定期公演

シンフォニエッタ 静岡が創立20年を記念して開催する公演の3回目。ヴァーレーズで開始されたシリーズは、真にポスト・ヴァーレースと呼ばれるに相応しい作曲家の一人、クセナキスへと至った。ル・コルビュ

ジエ門下の建築家でもあつたクセナキスは、音楽に数学的理論を持ち込んだ作曲家として知られるが、それは徒に術学的なものではなく、1950年代に隆盛を極めたクラスター（音塊）の音楽に、動力学的な

可能性を齎した。
ただ、当日のプログラムは、そういったクセナキスの作風からすると、些か大人し目の作品が並ぶ。作曲年代順に、前半に《アトレ》、《ネシマ》、後半に《エペイ》、《ワール



アトレ



ネシマ



エペイ（作曲者指定の配置）



ワールグ

グ》。総じて丁寧な演奏が展開し、この丁寧さに見合つた選曲と納得。特に《エペイ》、《ワールグ》。録音からは聴きとれない微分音由来の音響の軋みが独特で、楽曲への評価も一新させる成果。指揮は中原朋哉、《ネシマ》のメゾ・ソプラノに鳥木弥生、松浦麗。(10月10日、三鷹市芸術文化センター風のホール)

(石塚潤一)